

Eureka XII

六年制通信 No.24 令和6年10月25日(金)号

自分で見つける

10月是新ドラマがたくさんありますね。よほど面白くなさそうなもの以外、第1話は観るようにしています。NHKで「宙わたる教室」というドラマが始まりましたが、観ている人いますかね。定時制高校が舞台ですが、君たちにはピンと来ないでしょうね。定時制というのは昼は働いて夜に勉強する学校で、この制度は戦後数年のうちに出来ました。ですから生徒の年齢も学力もバラバラなのですね。そんな生徒たちの前に研究職を捨てて高校教師の道を選択した理科の先生が現れます。不良が一人、不良というのも死語のような気がします、とにかく一人通っています。先生は彼がディスレクシアだと見抜きます。ディスレクシアとは知的には全く問題ないのですが文字の読み書きに著しい障害があるので文章題ができないのですね。トム・クルーズがそうだとされています。その不良くんは自分の障害を知らず、ただ勉強ができないダメな奴と思い込んでいます。先生は不良くんに空がなぜ青いかを確かめる実験を見せます。彼が興味を持っていることを知ったからです。その後彼は先生の科学実験を手伝うようになっていきます。知的好奇心に素直に従える環境と指導者に会ったというわけですね。若者の知が啓かれていく瞬間(啓くは「ひらく」)を見るのはいいものですね。啓蒙や啓発というのは英語では *enlightenment* ですが、綴りに *light* があるでしょ。心の中に *light* をとすという意味なのです。日本語で啓蒙と言えど何か大層な感じがしますが、要するに暗かった知性を明るくすることですね。

アメリカの教育者ウィリアム・ウォードは「並みの教師は語る。良い教師は説明する。優れた教師はやってみせる。偉大な教師は生徒の興味をかきたてる」と言っています。だとすると「宙わたる教室」の先生は偉大な先生ということですね。ただしそれは、その不良くんにとっては、です。万人の興味をかきたてる授業というのはちょっと考えにくいですからね。教師は生徒の興味をかきたてるような授業をしなければならない、やる気スイッチを押さなければならない(これ、万人に「やる気」があるという前提ですけどね)、そもそもスイッチがどこにあるのかを見つける能力が教師には必要だとか、これらはみな昔からよく言われていることです。私は、しかし、本来は自分で自分の興味関心を見つけ育んでいくものだと思います。スイッチを押されるのを待っていてはいけません。自分で押すべきです。教師は、あるいは保護者は精々そのきっかけをつくるか手伝いができるくらいではないでしょうか。先生というのは、興味関心を持った生徒に求められるべき存在だと考えた方がいいと思うのですが。

私事で恐縮ですが、ひょっとして何かの参考になるかもしれないので、英語が大嫌

いだった私が英語に興味を持ったきっかけをお話しします。中学校で **easy** という単語を習いますよね。「簡単な」という意味で、反対語は **difficult** だと。やがて **easily** や **ease** を習います。ここで **ease** が単に「簡単」という日本語の意味ではないことを知ります。さらに軍隊などで整列していて「気をつけ」から「休め」と言いたいときは **At ease!** と言い、「気楽にやりなよ」なら **Take it easy.** と言うことを習います。サイモンとガーファンクルの名曲「明日に架ける橋 **Bridge Over Troubled Water**」の3番の歌詞に **I will ease your mind.** というのが出てきます。動詞もあるんですね。結局 **ease** は心の安らぎや心に波風のたっていない状態を表す単語なのだとわかります。眉間にしわを寄せて取り組まなくていい問題を **easy** というわけですね。その後、何となく **disease** 「病気」という単語を眺めているときに、**dis-**と **ease** に分かれて見えたのですね、急に。語頭の **dis-**は反対の意味を表します。君も **like** の反対は **dislike** であることは知っているでしょう。つまり私たちが「病気」と習った単語は「**ease** ではない状態」を指していることになるはずです。きっと昔は「不安」の意味だったのではないかと語源辞典で確かめたら果たしてそうでした。このとき、バラバラに習った知識が頭の中で統合される感覚を初めて味わったのですね。そして、私はこういうことを面白いと感じる人間なのだと自分を気づいたわけです。

今週のおすすめ

・グリム 『ベスト・セレクション初版グリム童話集』 (白水社)

前に紹介した『赤ずきんの殺人』の回で、グリム童話の初版を探して読んでごらんといいましたが、きれいな挿絵つきのが書棚にあったので図書館に置いておきます。残酷なことをあっさりと書いてありますが、原典を知っておくのは大切なことですからね。有名なシンデレラは「灰かぶり」というタイトルになっています、というかこちらが本当なんですよ。意地悪な姉二人にいじめられるわけですが、最後に靴を履くシーンがありますよね。靴が小さくて入らないので長女は踵を二女はつま先をナイフで削ると、しかもそれを母親がアドバイスするといったシーンは君たちには新鮮かもね。ちなみにガラスの靴ではなく金の靴。カボチャが馬車になったりもしません。

白雪姫はだいたい君たちの知っている展開ですが、ラストの毒リンゴで姫が死んでから息を吹き返すまではおそらく皆さん初めて読むことと思います。王子様のキスで復活、なんてことはありません。棺を運んでいる小人がつまずいた拍子にリンゴが口から出て…、なんて、これは広く知られているかもしれませんが、これも違います。原典はもっと面白いですよ。私は笑ってしまいました。

ま、三六編の短編集と思って読んでみて下さい。「眠りの森の美女」もあります。もちろんタイトルは違って「いばら姫」。こっちは王子のキスですよ。『ラプンツェル』もそのタイトルのままありますが、物語は「塔の上のラプンツェル」とはずいぶん違います。髪の毛の長いところくらいかな、似ているのは。今に伝えられている物語ももとはこうだったんだということを知るのは楽しいですね。

BGM は Paul McCartney & Michael Jackson の *Say Say Say* でした…。